

ダニエル書 - 第百十四号

最後の世代：エゼキエルの預言の成就と十四万四千人の封印の解明

Jeff Pippenger

2024-03-03

2001年9月11日に第三の災いの到来を目撃した世代は、地上の歴史の最後の世代である。この真理を確証するエゼキエル書の箇所は、ミラー派によって、十人の乙女のたとえ、したがってハバクク書2章と直接結びつくものとして理解された。その歴史において、「もはや遅れることはない」とされたハバクク書2章の幻で、1844年10月22日に成就したものは、やがて米国に到来する日曜法を予表していた。しかし、「もはや引き延ばされない」幻に関するエゼキエルの予告は、2001年9月11日の第三の災いの到来とともに始まった十四万四千人の封印の歴史において、完全に成就している。

主の言葉が私に臨んだ。「人の子よ、イスラエルの地で彼らが言っている『日は長引き、すべての幻は外れる』というあの諺は何か。だから彼らに告げよ。『神である主はこう言われる。わたしはこの諺をやめさせる。イスラエルではもはやこれを諺として用いない。むしろ彼らにこう言え。「日は近く、すべての幻の成就も近い。」』イスラエルの家のうちには、もはやむなしい幻も、へつらいの占いもない。わたしは主である。わたしが語れば、わたしの語る言葉は成就し、もはや引き延ばされることはない。反逆の家よ、あなたがたの日に、わたしは言葉を語り、それを行う、と神である主は言われる。」さらに主の言葉が私に臨んだ。「人の子よ、見よ、イスラエルの家の者たちはこう言っている。『彼が見る幻は多くの日の後のことであり、彼は遠い時代について預言している。』それゆえ彼らに言え。『神である主はこう言われる。わたしの言葉は、もはや一つとして引き延ばされない。わたしが語った言葉は行われる。』と神である主は言われる。」 エゼキエル書12章21-28節

すべての預言者は終わりの日々について語っており、「イスラエルの家の内」にある「むなしい幻」と「へつらいの占い」は、偽りの「後の雨」、すなわち「平和と安全」のメッセージであって、「彼が見る幻は多くの日のちのことで、彼は遠く離れた時代について預言している」と論じる。これはハバククの「論争」である。というのも、「むなしい幻」を掲げる者たちは、「彼が見る幻」に反論するからだ。彼らは「彼が見る幻は多くの日のちのことで、彼は遠い将来の時代について預言している」と主張する。「平和と安全」のメッセージの使者たちは「日は長引き、すべての幻は失敗に終わる」と主張する。結局のところ、彼は2020年7月18日を予言したではないか。「むなしい幻」の使者たちは、その章の最初の二節でエゼキエルによっても示されている。

主の言葉がまた私に臨み、こう言われた。「人の子よ、あなたは反逆の家のただ中に住んでいる。彼らには見る目があっても見ない、聞く耳があっても聞かない。彼らは反逆の家だからである。」 エゼキエル書 12:1, 2

預言者たちは皆互いに一致しており、皆が終わりの日々について語っている。そして、キリストがご自身の宣教の歩みの中で屁理屈をこねるユダヤ人に語りかけたとき、彼はイザヤを引用し、神から離縁されつつあったその屁理屈をこねるユダヤ人を、「見る目が

あっても見ず、聞く耳があっても聞かない者」として指し示した。今もその時と同様に、エゼキエルは、後の雨のメッセージに反して「平和と安全」のメッセージを唱える、現代の屁理屈をこねるユダヤ人、すなわちラオデキア的アドベンチズムの嘲る者たちに語りかけている。イエスは、ご自身が御言葉の中に定められた規則に従っておられたので、彼の予言は、彼が屁理屈をこねるユダヤ人に語りかけた時代よりも、さらに具体的に終わりの日々を指している。

だから、彼らにはたとえで語る。見ていながら見ず、聞いていながら聞かず、理解もしないからである。彼らについては、こう言われたイザヤの預言が成就している。『聞くには聞くが、理解しない。見るには見るが、悟らない。というのも、この民の心は鈍くなり、耳は聞こえにくくなり、目は閉じてしまった。いつか、目で見、耳で聞き、心で悟って立ち返り、わたしが彼らを癒やすことのないように。』しかし、あなたがたの目は幸いだ。見ているからであり、あなたがたの耳も幸いだ。聞いているからである。まことにあなたがたに言う。多くの預言者と正しい人々が、あなたがたの見ていることを見たいと願いながら見られず、あなたがたの聞いていることを聞きたいと願いながら聞けなかったのである。マタイによる福音書 13:13-17

「聞いてはいるのに聞かず、見てはいるのに見ない」民のありさまは、今まさに退けられつつある、かつての神の民に特徴的である。この預言的現象は、そのような状況についてのイザヤの預言の成就である。すべての預言者と同様に、イザヤはキリストとともに終わりの日について語っている。

ウジヤ王が死んだ年に、私は主が高くあげられた御座に座しておられるのを見た。その衣の裾は神殿に満ちていた。その上にはセラフィムが立っており、それぞれが六つの翼を持っていた。二つで顔を覆い、二つで足を覆い、二つで飛んでいた。互いに呼び交わして言った。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主。全地はその栄光に満ちている。」呼ばれるその者の声によって、戸の柱は揺れ、家は煙で満たされた。そこで私は言った。「ああ、わざわざ、私は滅びる。私は汚れた唇の者であり、汚れた唇の民の中に住んでいるからだ。しかも私の目が王、万軍の主を見たのだから。」するとセラフィムのひとりが、祭壇から火ばさみで取った燃える炭を手にして、私のところへ飛んできた。彼はそれを私の口に触れさせて言った。「見よ、これがあなたの唇に触れた。あなたの咎は取り去られ、あなたの罪は清められた。」また私は主の声を聞いた。「だれを遣わそうか。だれがわれわれのために行くだろうか。」そこで私は言った。「ここに私がおります。私をお遣わしてください。」彼は言われた。「行って、この民に告げよ。『よく聞け、しかし理解するな。よく見よ、しかし悟るな。』この民の心を鈍くし、その耳を重くし、その目を閉ざせ。彼らとその目で見、耳で聞き、心で悟って立ち返り、いやされることのないように。」 イザヤ書 6:1-10.

イザヤ、エゼキエル、そしてキリストは皆、ハバクク書2章の成就の時、すなわち終わりの時代の後の雨の期間に、後の雨のメッセージの真偽をめぐって論争が起こっている中で、印を受けつつある者たちを表している。イエスによれば、この成就の時期には、義なる者たちはたとえ話を「見て」おり、それは預言の象徴である。「賢い者たち」は後の雨に関する預言のメッセージを悟っているが、揚げ足取りをするユダヤ人に代表される者たちは見も聞きもせず、しかもエゼキエルによれば、予言の成就是遙か未来のことだと主張して「平和と安全」のメッセージを掲げる。彼らは予言そのものを否定はしない。揚

げ足取りをするユダヤ人も、来るべきメシアに関する予言を口先では認めた。だが、ただその出来事を遙か遠い未来へと先送りしただけである。しかしイエスは、自分たちの時代の預言的メッセージを「見る」者たちは幸いだと言われた。

キリストの時代においては、それは、聖霊が下った彼のバプテスマの時に到来したメッセージであった。彼のバプテスマにおける聖霊の降臨は、1840年8月11日における黙示録10章の天使の降臨を予表していた。どちらの歴史における神の降臨も、その時代の現在の真理のメッセージの到来を示した。イエスにとってそれは、バプテスマによって表された、彼の死と復活のメッセージであった。ミラー派にとってそれは、時の預言という試みのメッセージを確認した、第一と第二の災いに関するイスラムのメッセージであった。これら二つの歴史はいずれも、2001年9月11日に後の雨の試みのメッセージが到来したと符合する。このゆえにホワイト夫人は次のように記している：

1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、今こそ力をもって示されるべきである。多くの人々が方向を見失っているからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられなければならない。

キリストは言われた。「あなたがたの目は見えているので幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているので幸いです。まことにあなたがたに言います。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ていることを見たいと願いながら、見ることができず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら、聞くことができませんでした」[マタイ 13:16, 17]。1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いです。

メッセージは与えられた。そして、そのメッセージを繰り返すのに遅れがあってはならない。時のしるしが成就しつつあり、終結の働きは成し遂げられなければならないからである。短期間に大いなる働きが行われるだろう。やがて神の定めによってメッセージが与えられ、それは大いなる叫びへと高まるだろう。そのときダニエルは自分の定められた持ち場に立ち、その証しをする。

私たちの諸教会は目を覚まさなければならない。私たちは世界史上最大の出来事の瀬戸際に立っており、サタンが神の民に力をふるって彼らを眠り続けさせることがあってはならない。ローマ教皇権はその権勢を現すであろう。今こそ皆が目を開き、聖書を調べなければならない。というのも、神は忠実な者たちに、終わりの時に何が起こるかを明らかにされるからである。主のことは力をもってその民に臨むであろう。…

「私に示されたのは——私たちは眠っており、私たちへの訪れの時を知らないということ。しかし、もし私たちが神の前にへりくだり、心を尽くして神を求めるなら、私たちは神を見いだすでしょう。」『Manuscript Releases』第21巻、436-438頁。

メシアであるキリストの歴史における現在の真理のメッセージと、1840年から1844年の現在の真理のメッセージによって型として示されてきたそのメッセージは、ミラー派のメッセージが繰り返される終わりの時代を指し示している。歴史の中で「見ることも聞くこともできない」と表されている者たちは、「自分の顧みられる時を知らない」。イザヤが、見てはいるが見ない、後の雨の偽りのメッセージの使者たちへの最初の言及を行うとき、彼はこの期間の始まりの時を示している。これは、ホワイト夫人が「神の定めによ

るメッセージであり、それは大いなる叫びへとふくらんでいく」と述べた期間である。「神の定め」とは、そのメッセージが到来する特定の時を表しており、イザヤ書6章3節でイザヤはその時を特定している。

互いに呼び交わして言った。「聖なる、聖なる、聖なるかな、万軍の主。全地はその栄光に満ちている。」イザヤ書 6:3.

ホワイト姉妹は、天使たちが互いに「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」と呼び交わし、イザヤが「目があって見てはいるが、見てはいない者たち」を描いている箇所が、2001年9月11日に成就したと指摘している。

彼ら〔天使たち〕は、やがて全地が主の御栄光で満たされるときを見つめつつ、調べも美しい詠唱のうちに、互いにこだまし合って「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、万軍の主」と勝利の賛歌を響かせる。彼らは神をあがめることで完全に満ち足りており、御前で、主の御喜びの微笑みのもとにあって、それ以上何も望まない。主の御かたちを帯び、主に仕え、主を礼拝することにおいて、彼らの最高の志は完全に達せられる。Review and Herald, 1896年12月22日。

2001年9月11日、十四万四千人の封印が始まり、後の雨が降り始め、十人の乙女のたとえが繰り返される中でハバククの論争が始まった。その時点でエゼキエルの預言は完全に成就した。預言のことはもはや遅れることはなく、2001年9月11日を目撃した世代が地球の最後の世代である。というのも、アドベンチズムの終わりにおける幻が、キリストの再臨において恩恵期間の終結を告げているからである。この事実についての第二の証言は、ルカによる福音書21章に見いだされる。

まことに、あなたがたに言う。すべてが成就するまでは、この世代は決して過ぎ去らない。天地は過ぎ去る。しかし、わたしの言葉は決して過ぎ去らない。ルカ 21:32, 33.

ルカによる福音書21章で、イエスは世界の歴史の最後の世代を特定している。彼は、西暦70年のエルサレム滅亡からミラー派運動の歴史に至るまでの継起的な歴史の概観を示したばかりである。その後、預言的歴史を直接に特定していく叙述から離れ、先に示した預言的歴史を繰り返し、さらに拡大するたとえ話を提示する。こうして彼は同じ叙述に対して二つの内部的証言を与え、これらの出来事を目撃する「世代」が彼の再臨まで存続することを示して結論づけた。したがって文脈上、十四万四千人によって表される世代が特定されることになる。

十四万四千人が封印される歴史は最後の世代に当たり、天地が過ぎ去るときに生きていながらも、彼らは死を味わうことがない。

しかし、主の日は夜の盗人のように来る。その時、天は大きな轟きとともに消え去り、諸要素は激しい熱で溶け、地も、その中のわざも焼き尽くされる。これらがみなこのように崩れ去るのなら、あなたがたは、すべてにおいて聖い生き方と敬虔さをもって歩む者であるべきです。神の日の到来を待ち望み、またその来臨を早めようとするべきです。その日には、天は火に包まれて解け失せ、諸要素は激しい熱で溶けます。ペテロの第二の手紙 3章10-12節

キリストの再臨は、キリストの変容において示された。

変貌の山において、モーセは罪と死に対するキリストの勝利の証人であった。彼は、義人の復活の時に墓から出てくる者たちを代表していた。死を見ることなく天に移されたエリヤは、キリストの再臨の時に地上に生きていて、「最後のラッパに際し、たちまち、まばたきする間に」変えられる者たち、すなわち「この死ぬべき者が不死を着」「この朽ちるべき者が不朽を着」ときの人々を代表していた。（コリント第一 15:51-53）イエスは、「罪を負うことなく救いのためにふたたび来られる」ときに現れるように、天の光をまとっておられた。というのも、主は「聖なる御使いたちとともに、御父の栄光のうちに」来られるからである。（ヘブル 9:28; マルコ 8:38）救い主が弟子たちに与えた約束は、今や成就した。山の上では、来たるべき栄光の御国が縮図として示された一王であるキリスト、復活した聖徒たちの代表としてのモーセ、そして携え上げられる者たちの代表としてのエリヤ。The Desire of Ages, 421.

死を見なかったエリヤは、死を見ない十四万四千人を象徴し、モーセは死ぬ者たちを象徴している。終わりの日には、その二つのグループが黙示録7章において、十四万四千人と大群衆として表されている。黙示録6章で第五の封印が開かれるとき、暗黒時代にローマ教皇制によって殺害された者たちには白い衣が与えられる。

「彼が第五の封印を開いたとき、私は、神の言葉と彼らの持っていた証しのために殺された者たちの魂が、祭壇の下にいるのを見た。彼らは大声で叫んで言った。『聖にして真実なる主よ、いつまで、地に住む者たちに対して、私たちの血のための裁きを行い、復讐してくださらないのですか。』そして、彼ら一人ひとりに白い衣が与えられ[彼らは純潔で聖なる者と宣言された]、彼らには、なおしばらくの間休んでいるようにと言われた。彼らの仲間であるしもべたちや兄弟たちの中にも、彼らと同じように殺されることになっている者たちがいて、そのことが成就するまで。」[黙示録 6:9-11]。ここでヨハネに示されたのは、現実の出来事ではなく、将来のある時期に起こるであろう事柄の情景であった。Manuscript Releases, volume 20, 197.

殉教者たちは、神がいつ自分たちの殺害の復讐をしてくださるのかを問いかけている。殉教者は殺される前からイエスに対する信仰を持っていた。というのも、まさにその信仰の現れこそが、教皇権が彼の殺害に踏み切る引き金となったからである。白い衣はキリストの義を表しているが、殺されたこれらの魂に与えられた白い衣は、彼らの殉教の後に与えられたものである。その衣は、単にキリストの義を示すだけでなく、殉教の象徴である。殉教者は、殺される前からキリストの義の衣を身にまとっている。黙示録七章の大群衆には白い衣が与えられるが、これは、やがて来る日曜法の流血の惨事の中で死ぬ者たちを表している。したがって、十四万四千人はエリヤによって象徴され、主にあって死ぬ忠実な者たちは、変貌の山でのモーセによって象徴されている。

十四万四千人は死を見ない世代であり、彼らはルカの福音書第21章で、天地が滅びるときに生きていてキリストが言及している世代でもある。

次回の記事でこの研究を続けます。

アベルの殺害は、神が宣言された、蛇と女の子孫-すなわちサタンとその配下と、キリストとその従う者たち-との間に存在する敵意の最初の実例であった。人の罪によってサタンは人類を支配するに至ったが、キリストは彼らがそのくびきを脱ぎ捨てることができるようにされた。神の小羊への信仰によって、ある魂が罪に仕えることをや

めるたびに、サタンの怒りは燃え上がる。アベルの聖い生涯は、人が神の律法を守ることは不可能だというサタンの主張に対して証しした。悪しき者の霊に動かされたカインは、アベルを支配できないと見るや激昂して、その命を奪った。そして、神の律法の義を擁護して立つ者がどこにしようとも、同じ霊が彼らに対して現れる。それは、あらゆる時代を通して、キリストの弟子たちを火刑に処すために杭を立て、薪の山に火をつけてきた霊である。しかし、イエスに従う者に加えられる残虐は、彼らを自分の支配に服従させることができないがゆえに、サタンとその軍勢によって扇動されるのである。これは、打ち負かされた敵の怒りである。イエスの殉教者は皆、勝利者として死んだ。預言者は言う、「彼らは[『悪魔、すなわちサタンと呼ばれる、あの古い蛇』]に対して、小羊の血と自分たちの証しの言葉によって打ち勝ち、死に至るまでも自分のいのちを愛さなかった」。黙示録12章11節、9節。族長と預言者、77。